

美しくよみがえった、 憩いとやすらぎの 親水空間。

かつては木材運搬のための運河として、また、農業や伝統産業に欠かせない清流として、京都市民の暮らしとともにあった堀川。近年は、度重なる水害により施された浸水対策により水源が絶たれ、雨天時に下水が放流される排水路になっていました。しかし、その後、堀川再生の気運が高まり、地域住民の意見を反映させた整備が、平成21年3月に完了しました。現地を訪ね、美しくよみがえった堀川の様子を紹介します。



着工前



完成



せせらぎが戻った堀川は、市民の憩いの場になっています。

延べ1,000人以上の人々が、 水辺環境づくりのワークショップに参加

この整備事業は「堀川に清流を蘇らせよう」という市民の声に応える形で、平成10年に京都府・京都市共催で「京の川再生検討委員会」が設けられました。平成11年、堀川は「山紫水明の町づくり」をテーマにした提言に基づくモデル河川となり、京都市はこの提言を受けて、まちづくりと一体になった水辺空間の整備を行うことを決定。そして平成12年から市民参加型のワークショップでまちなみと調和する景観づくり、生活にとけこんだ水辺環境づくりが行われていきました。ワークショップには、地元延べ1,000人以上の人々が参加しました。事業区間を5つのゾーンに分け、意見交換しながら最終デザインを決定。この最終デザインをベースに実施設計が練り上げられました。



何度も開催されたワークショップでは、堀川の歴史もふまえて意見交換



■計画図のA～Eは、5つに分かれた事業区間を
①～⑥の番号は、各写真の位置を表しています。



① 起点となる賀茂川サイフォン。
停電時も自家発電で水をくみ上げます。

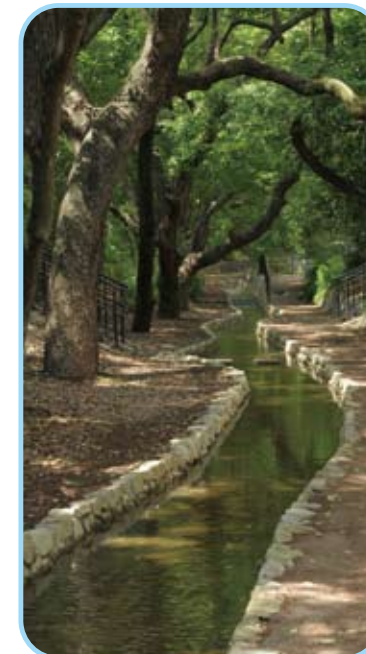
緑の中央分離帯で、癒される親水空間に

新たに整備された全長約4.4kmの区間を歩いてみました。最初に訪れたのは、紫明せせらぎ第一公園。水路の起点となる取水設備・賀茂川サイフォンのある場所です。北園川・泉川とつながる第二疏水分線の水が、すぐ目の前にある賀茂川の川底をくぐり、ここでポンプによってくみあげられ、新たに設けた水路を紫明通・堀川通を経由して、今出川通から御池通の堀川に流されていきます。今出川通から上流の水路は、既存の樹木を生かして池などを設けた車道の中央分離帯の中にせせらぎが設けられており、気持ちの良い親水空間になっていました。

歴史を今に伝えながら、よみがえった堀川

次に訪れたのは、今出川通から下流にある、一条戻橋付近です。一条戻橋の北側は大きな樹木が生い茂り、静かな森の中にいる感覚にとらわれます。河川敷には土が残されており、とても心がやすらぎました。さらに下流へ足を進めると、多くの子どもたちが歓声を上げ、水遊びではしゃいでいました。堀川の親水空間がこの地域に欠かさないものになっていることがわかります。石造りのアーチが目を引く堀川第一橋が見えてきました。その近くに今でも残るレンガ積みの橋台跡は、明治28年に日本最初の路面電車が堀川沿いに走っていた当時のものだとか。堀川の再生事業は、単に美しい水辺空間の再生だけでなく、若い世代や子どもたちへの「歴史・生活文化の継承」という役割も担っているのだと、感慨深いものがありました。

親水空間にはイベントにも利用できる大階段やベンチ、さらには緑豊かな芝生広場、公園に出入りしやすいスロープなどが設けられていました。水路には段差をつけてせせらぎの音を演出するなどの細やかな配慮もなされ、水辺の環境再生の重要性を改めて感じました。



② 森の中を歩いているような感覚の、
一条戻橋北側の遊歩道



③ 水路の落差で生じる水の音にも癒されます。



④ 時代を感じさせる、堀川第一橋
付近のレンガ積みの橋台跡



⑤ 緑豊かな芝生・植樹帯も。
変化のある風景が続きます。



⑥ 導水は下水放流渠に
流れこんでいます。

防災に配慮した消火用水

賀茂川サイフォンでは人工的に水をくみ上げていますが、災害時に備え、常時流れる水は消火用水・災害時の生活用水としても利用可能。消防車のポンプを差し込み取水できる「消火ピット」を、中央分離帯と堀川開渠部の河床に合計24カ所設置し、消防車への迅速な水供給を可能にしています。

■消火ピット（中央分離帯）活用の消火活動イメージ

